嘉永五年の講師養成の旅

301日に及ぶ長崎～大坂～江戸の旅を総括

樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人
会長
土森正一

文責
寺尾敏夫

	和暦	西暦	記事	年齢	樋口真吉
■	文化12年	1815		1歳	土佐中村に徒士樋口信四郎の長男として出生
■	天保8年	1837	大塩平八郎の変	23歳	★第一回回国の旅：長崎訪問：柳川藩大石新陰流に入門し29日で免許皆伝授与さる。
■	天保11年	1840		26歳	★第二回回国の旅：九州へ剣術修行
	天保14年	1843	アヘン戦争	29歳	・清国が英国に負ける！
■	弘化元年	1844	オランダ国王開国を勧告	30歳	○文武館建設の建白書提出（第一回）
■	弘化2年	1845		31歳	★第三回回国の旅：大坂京都の旅
■	弘化4年	1847		33歳	★第四回回国の旅：鎮西三遊の旅九州へ
■	嘉永2年	1849		35歳	○文武館建設の建白書提出（第二回）
					★第五回回国の旅：剣術・砲術修行に九州へ　長崎・柳川
■	嘉永3年	1850		36歳	●坂本龍馬（渡川の河川改修工事）と幡多奉行所で逢う
■	嘉永5年	1852	佐賀藩反射炉築造	38歳	★第六回回国の旅：中村⇒長崎⇒博多⇒江戸⇒帰郷の講師養成の長期旅行
					長崎でジョン万次郎に面会/大坂から佐々木高行が合流/江戸で佐久間象山に学ぶ
■	嘉永6年	1853	ペリー浦賀来航	39歳	4月福岡宮内が中村に来航、面談を受ける。１１月歩行格に昇進
■	安政元年	1854	日米和親条約	40歳	下田など幡多郡１７か所に砲台設置・民兵募集/入田で銃砲操練始まる。
■	安政2年	1855		41歳	○6月８日文武館完成　　⇒藩政記録に記載がない。

文武館の構想はいつ？

●中村藩が廃藩になって以来武士階級がいなくなった中村は徳川幕府からの外国船打ち払い令に対し、幡多奉行所では在野にいる郷士の子弟を教育して戦力化するしか手が無かった。樋口真吉は父・信四郎から家督を継ぎ幡多奉行所に勤務する立場になった。既に幡多奉行所内では藩校の必要性の議論があったのではないか。藩校と言っても建物を造ればいい訳ではない。教育の理念と教授陣を養成する必要があり、真吉と奉行は綿密に計画を練ったと思われる。文武館構想が纏まった段階で藩庁に藩校設立の建白書を真吉の手で書き上げて提出したのが弘化元年であった。

遠近鶴鳴の死

●真吉は学問の師である遠近鶴鳴には文武館の件は相談し、当然講師陣の最有力者として期待していたはず。ところがこの文武館建設の建白書を出したこの年に遠近鶴鳴は五十歳の若さで急逝した。真吉には想定外だったはずである。文武館で教える学問にどの学派を選ぶのか、真吉がこの解を求めて京大坂に向かったのが第３回の旅で、第４回の旅では博多の亀井塾に足を運んだ。そして亀井学派を選択したのである。

●真吉は武者修行と称

西暦	旅	旅程	目的地	目的	剣術	砲術	情報	国学	備考	面談人物	同行者
1837年	天保八年九州第一回廻国	104日	長崎	長崎の情報収集	●		●		高島四郎太夫・荻野流砲術と記す		桑原政恒
			宮部	大石新陰流免許取得	●					大石進・種次	
1840年	西遊記稿下天保11年9月	89日	宮部	大石道場再訪し稽古	●				黒原五郎が免状		黒原五郎
			長崎	情報収集			●		出島・唐人屋敷見聞・長崎の情報収集		
1841年	宇城行　天保12年	3日	宇和島藩								
1845年	文武館建白1										
1846年	上国行　弘化３年	43日	大阪・京都	武芸用				●	武芸用とあるも気楽な旅で、遠近鶴鳴の師に面会している。	篠崎小竹 岩垣松苗	山本・清水
1847年	鎮西三遊　弘化4年	114日	宮部	大石道場・稽古なし					大石種次に挨拶するも剣術なし	大石種次	宮崎甚三郎
			博多	亀井塾				●	論語語由を筆写	亀井暘洲	
1849年	文武館建白2										
1849年	鎮西四遊　嘉永二年	87日	長崎	高島砲術入門		●			高島流砲術書を写す	高島浅五郎	
				大木藤十郎の西洋兵学		●			西洋兵学・砲術	大木藤十郎	
1851年	銃用自他　嘉永4年	28日	高知	大砲買付		●			幡多17か所に砲台設置準備		
1852～53年	壬生漫遊日記　嘉永5年	301日	岡藩	交流	◎				岡藩で御前試合	千葉栄太郎	石山孫六・山崎文三郎 桑原介馬・寺田忠次 遠近晋八・安岡東二郎
			長崎	西洋砲術の情報収集		●	●		高島流砲術の情報を得る	高島浅次郎・大木藤十郎・ジョン万次郎	
			福岡	亀井学派の書籍の筆写				●	亀井塾へ遠近晋八と安岡東二郎を紹介	亀井暘洲	遠近晋八他
			萩	交流	◎				萩藩士と交流	木島又兵衛	
			大坂						佐々木三四郎と大坂で合流し江戸へ		佐々木三四郎
			江戸	佐久間象山塾入門	◎	●			西洋砲術塾入門	佐久間象山	
1855年	文武館完成										

土佐藩 樋口真吉の『諸兵家尊名鈔巻四』について

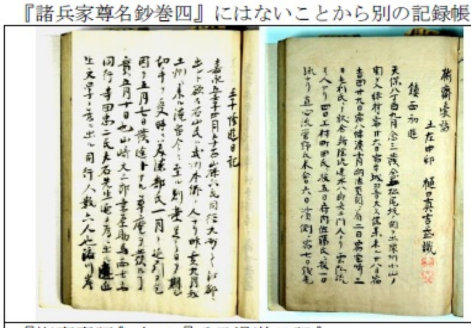
森本邦生（貫汪館）

Ⅰ．はじめに

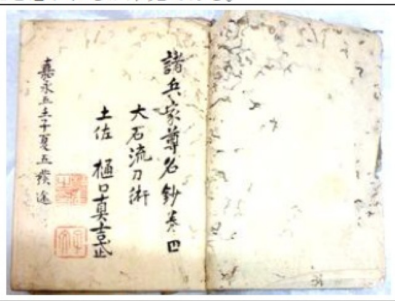
樋口真吉（1815～1870）は土佐中村の人で天保８年（1837）、天保 11 年（1840）、弘化４年（1847）、嘉永２年（1849）、嘉永５年（1852）と計５回、九州に赴いている。そのうち柳河藩の大石進のもとでの稽古を含んで廻国修行したのは天保８年（1837）、天保 11 年（1840）、弘化４年（1847）、嘉永５年（1852）の計４回であり、嘉永５年（1852）は江戸の剣術家でのちに土佐藩士となる石山孫六とともに九州から江戸に至っている。なお嘉永２年（1849）は長崎へ砲術修行に赴いており剣術の修行はしていない。

天保８年（1837）の廻国修行については日記を解読して全文を資料として付して平成 21 年の日本武道学会第 42 回大会で発表し[1]、嘉永５年の廻国修行日記についても『彬齋嚢語』[2]全文を解読して天保 11 年の廻国修行日記『西遊記稿本下　再遊之巻』等とともに『壬子漫遊日記』を資料として付して平成 23 年の日本武道学会第 44 回大会で発表した[3]。

本研究の目的は嘉永５年の廻国修行日記である『壬子漫遊日記』と廻国修行の際に試合した相手を記した英名録である『諸兵家尊名鈔巻四』[4]を照合し新たな知見を得ようとするものである。なお『壬子漫遊日記』には嘉永５年５月 14 日の宇和島での滞在中の記録に「試合姓名及技術ノ巧拙等ハ別録アリ」という記述があり、試合姓名に関する別録が『諸兵家尊名鈔巻四』のことであると考えられる。「技術ノ巧拙等」に関する記録は『諸兵家尊名鈔巻四』にはないことから別の記録帳があったと思われるが未見である。



『彬齋嚢語』中の『壬子漫遊日記』



『諸兵家尊名鈔巻四』

六回目講師養成の旅

●真吉の藩外への六回目は講師陣の養成のために立ち寄っている。。

して藩外に６回出かけているが、４回も長崎に立ち寄っている。。

めの長期合宿の旅で、文武館創建準備の総仕上げの旅であった。真吉の藩外への旅を一覧表にすると真吉の計画が実に周到に立案されていることが分るが、特に六回目の旅の構成は真吉が用意周到に立案したもので卓越した企画力を示している。。

①三百日に及ぶ講師養成計画の多額の費用を藩庁に申請している。そのお目付けに大坂から佐々木三四郎ら２名が旅に加わり見聞役を担っていたことで判る。

②講師候補生四名選抜

○遠近晋八

○桑原介馬、

○山崎文三郎、

○安岡東二郎

③旅の研修場所に長崎と佐賀藩内と江戸を最重点に滞在している。、

◆長崎十三日間

◆佐賀藩内二十四日間

◆江戸百十四日間

砲術の最新情報を長崎と佐賀藩から得ようと佐賀藩内で入念に情報取集するように計画。

④万次郎が長崎で解放される情報を得て、長崎で万次郎から米国事情を聞く機会を設定

⑤石川孫六と言う江戸本郷の剣客の道場を江戸での滞在先に指定、本人が高知滞在から江戸に帰る機会を利用して中村に呼び寄せて中村～長崎～江戸への長期合宿に参加させた。特に石山は一刀流達人で流派は違えども間崎滄浪から真吉を紹介されている剣客である。後に土佐藩士に採用され高知で勤務している。

⑥江戸での佐久間象山塾への入門、最新の砲

Ⅳ　嘉永５年の廻国修行日記『壬子漫遊日記』と英名録『諸兵家尊名鈔巻四』との照合

1. 『壬子漫遊日記』で稽古・試合が行われたことが確認できる日付を記した。『壬子漫遊日記』と『諸兵家尊名鈔巻四』で日付の異なるものに関してはそれを記入した。
2. 『壬子漫遊日記』で試合・稽古が行われている場合に流派名と師範名が記されている場合は両方を記し、流派名または師範名のみが記されている場合はそのように記した。試合が行われていることが記されていても流派名と師範名が記されていない場合には稽古または試合とのみ記した。必要に応じて『壬子漫遊日記』中の記録を抜き書きした。
3. 『諸兵家尊名鈔巻四』で確認できる流派名と師範を含めた人数を記した。師範が在席していなかったと思われる場合にも師範名が記してある場合は人数に含めた。
4. 表中では『壬子漫遊日記』を日記、『諸兵家尊名鈔巻四』を英名録と記した。

場所	日付	『壬子漫遊日記』	『諸兵家尊名鈔巻四』	備考
	嘉永５年 5/10	中村出発		
宇和島 明倫館	嘉永５年 5/14, 5/15	田宮流　多都嘉門	日付不明 田宮流　多都嘉門含め 27 名	
府内	5/23	直神影流	直心影流　津久井嘉助含め 13 名	日記の流名は漢字間違い
	5/24	直指流　木戸孫九郎	直指流　木戸孫九郎含め 15 名	
岡	5/28	抜刀流、直指流、貴直流、東軍流 「夫より御自筆御好御渡し、一番孫六・辰三郎、二番忠次・左盛、三番御家来壱組、四番同、五番真吉・直之進、六番	抜討流　福永平次郎含め６名 直指流　柘植与一右衛門含め５名 貴直流　田辺十左衛門含め２名	日記の流名は漢字間違い 日記には東軍流があるが、英名録にはなし。 藩主によるお好みの

		介馬・藤太郎、七番又三郎・源平試合相済一同侯前に召され御直々仰出さる」		試合は一致
宮部 大石道場 7日	6/4 ～ 6/9	大石門下 「六日 稽古ニ出ル、宿酲甚し、高鍋藩石井寿吉・柿原澤之進・飫肥平川昇・木脇修平・武雄森健之進・大村巣山銕三郎・長州内藤平吉等也、就中寿吉一人相応之遣人也、此日石山氏足痛試合なし」	大石神影流　大石七太夫含め31名	日記の巣山は須山の間違い 大石神影流『諸国門人姓名録』[6]にも須山とある
島原	6/14	一刀流　杉野友之進 一刀流　矢島八馬	一刀流　杉野友之進太夫含め27名 一刀流　矢島八馬含め23名	
長崎 14日（6/16～6/29）	6/19	赤松次郎（縣）	神陰一刀流　赤松次郎含め21名 内1名は神明武信流村井嘉作門人 1名は佐賀藩諫早領の門人 1名は平戸藩の門人	赤松次郎はこのとき大石神影流と一刀流を合わせた神陰一刀流をなのっている。
	6/26	一刀流　松江精一	一刀流　松江精一含め18名 ほかに新陰流井原早助含め3名、同日に松江道場で試合	新陰流井原早助一門との試合日記に記述なし。
	6/27	村井嘉作	神明武信流　村井嘉作含め6名	英名録で村井嘉作の流派名が判明
大村	7/1	一刀流・片山流兼　宮川内匠 新影流　田川与惣衛門 四天流	一刀流・片山流兼　宮川内含め37名 新影流　田川與惣衛門含め31名 四天流　小島荘太郎1名	小島荘太郎は斎藤新太郎の『修行中諸藩芳名録』[7]の嘉永2年5月の大村藩での試合記録によれば唐津藩士

術情報を得られたことは最初から想定していたかは不明だが、真吉にとって最大の成果でもあった。何よりも講師候補の四名にとってこの長期合宿は文武両道の得難い経験を得て教育者として文武館の発展に寄与したはず。この講師養成の行程を真吉は日記に克明に記録している。その中の剣術の部分について森本邦男先生（日本剣道史の研究家）の論文に克明にレポートされている。その論文の一部を拝借してご紹介する。中村を出て宇和島藩での試合から江戸までの克明な記録がレポートされていて迫力があるというかその行間に試合を受ける側と申し込む側の想いが浮かび上がって見える。幕末のこの時期各藩とも何よりも新しい情報が得たく、試合を受けると訪問者の賄いは試合を受ける側が負担するというルールができていた。真吉はこれを利用したかもしれない。真吉一行の滞在日数を注目すると特に長いのは長崎、柳川、江戸だが、柳川の十五日間の前後に武雄、小城、佐嘉、久留米とあり、いずれも佐賀藩内である。真吉の狙いは恐らくは佐賀藩内を網羅的に廻って佐賀藩の砲術の製造、砲台築城、などについて佐賀藩の細かい動きの情報収集しようとしたのだと見て取れる。

試合1360名

●森本先生の分析によると宇和島藩から始まった他流試合の相手は１３６０名にもなる。もちろん真吉一人が試合をした人数ではなく真吉、石川孫六、山崎新六郎、遠近晋八、安岡東二郎、桑原介馬ら

六名と途中までは寺田忠次が、大坂からは佐々木三四郎、山田喜三之進が試合に参加している。何よりも他流試合後の情報交換に意味があったはずと思われる。

●江戸では石山道場で合宿しているので朝練で剣術の稽古ができ、他藩士との他流試合も居ながらに参加できた。終われば江戸の町に出て学問に砲術にと研鑽を重ねられた。真吉と遠近晋八は安積良斎塾に学び、真吉と桑原介馬、佐々木三四郎は佐久間象山塾に通った。山崎文三郎、安岡東二郎の記録は無いが誰かに学んだはずである。

○石山道場（宿舎）
・本郷三丁目弓町
○佐久間象山塾
・築地木挽町
○安積良斎塾
・神田駿河台

この３か所を現代の東京の地図に置いてみると本郷～木挽町の距離は健脚なら充分毎日通える場所に見える。

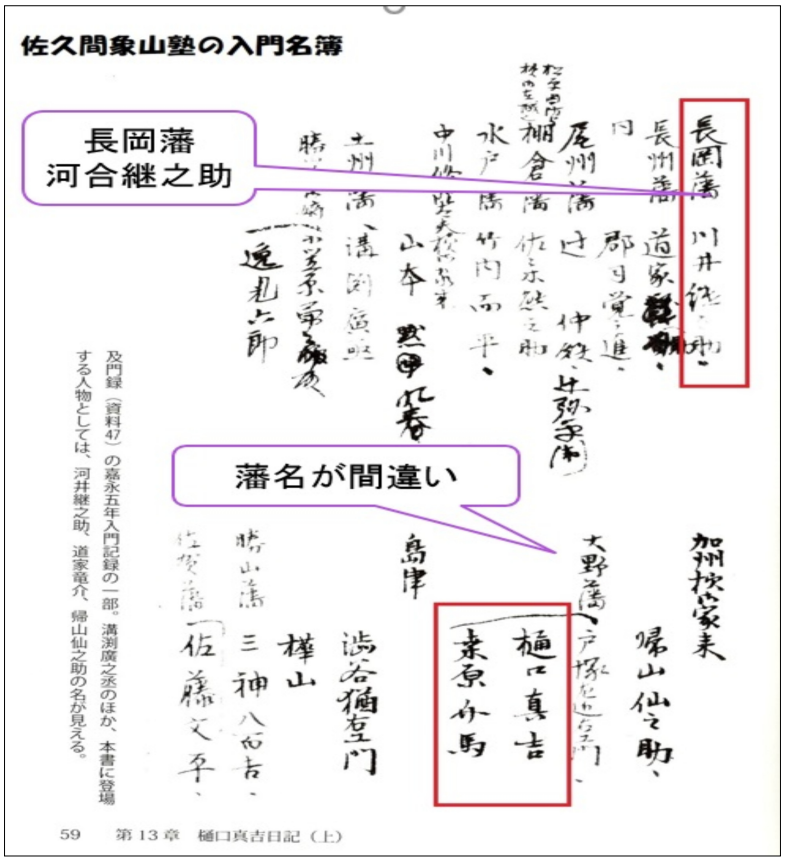
●今回の会報誌で敢えて６回目の真吉の旅の詳細を取り上げたのは、文武館を完成させる為の最後の大事な事業であったこの長期研修の旅を企画立案実行した真吉の能力は卓越しており剣豪真吉以上だと指摘しておきたい。

真吉卓越した能力

年	月日	旅・旅程	砲術研鑽	学問	補足・備考欄
1852年	12月21日				
嘉永５年	12月22日		佐久間象山訪問		
	12月23日				
	12月24日		佐久間象山塾入門		迦農込法を学ぶ
	12月25日				
	12月26日				
	12月27日		佐久間塾		
	12月28日				
	12月29日		佐久間塾		
	12月30日				
	12月31日				
１８５３	1月1日				
嘉永6年	1月2日				
	1月3日				
	1月4日		佐久間塾		
	1月5日				
	1月6日		佐久間塾		桑原介馬入門
	1月7日		佐久間塾		
	1月8日		佐久間塾		
	1月9日		佐久間塾		
	1月10日				
	1月11日				
	1月12日		佐久間塾		蜜語箋を獲る
	1月13日		佐久間塾		鈴林必携を獲る
	1月14日		佐久間塾		
	1月15日				
	1月16日		佐久間塾		雪
	1月17日				
	1月18日				
	1月19日				
	1月20日				
	1月21日		佐久間塾		
	1月22日				
	1月23日				
	1月24日				
	1月25日		佐久間塾		
	1月26日		佐久間塾		佐久間象山に別れを言う
	1月27日				

佐久間象山塾入門来

１５日通う！



下田の歴史

●下田に岡照美さんという八十六歳の夫人が六十代後半から地元の百八十七軒のお宅を一軒づつ訪問して、その家の故事来歴を聞いて廻ったというのです。その調査から驚きの歴史が見えてきたのです。同じ調査を今やろうとしても既に多くの老人たちが既に居ないので不可能です。その意味ではこの調査は大変貴重なものだと思います。

●驚きの歴史的事実が幾つも見えてきました。①現在の下田の人口は七百七十人位ですが、幕末から明治期には四千人の人口が居たといいます。つまり陸上交通が整備されていない時期には物流は船でした。下田港は昔は水深の深い良い港だったそうです。だから造船が盛んで船大工が大勢居て、四万十川の奥から筏で運ばれた材木で造船業が盛んだったと言います。船主が大勢集まって、芸者さんのいる料理屋が水戸地区に３軒もあったそうです。②その歴史をたどると1331年に尊良親王が下田に配流された時、京都から来た家が２軒残っていました。その家系が守ってこられたのが貴船神社だそうです。正に下田の歴史は貴船神社からスタートしたと言えそうです。②1468年に一条公が来たときやってきた家が十七軒現存してた。③1600年に来たという家が２２軒あった。関ケ原の闘いで徳川に付いて土佐藩を拝領した山内家と共に来て、山内和豊の弟に付いてきたが中村藩の廃絶で中村から下田に移ってきた家が該当していると想定される。④「幡多奉行として下田に入る」と記された家があった。しかも時期が1989年とあり、意味不明である。

●戦後のマッカーサー政策として日本人弱体化政策を推進した結果戦前の戸籍法を解体したことはご存知の通りです。今各家庭は本家、分家の概念もなく、家系を守っていく伝統も希薄になりつつあります。寂しいことです。

no	名前	出身都道府県	どこから	年号	西暦	職種	備考
167	森岡	徳島	徳島（あ	慶長	1600		中村藩３万石
180	横山			慶長	1600		中村藩３万石
181	吉井	徳島	徳島	慶長	1600	豆腐屋	中村藩３万石　△
187	渡辺			慶長	1600		中村藩３万石
171	安岡			慶長	1600		中村藩３万石
3	麻田					庄屋	中村藩３万石　山内大膳亮　家来
34	大藤			明暦	1656	大庄屋	
62	北川	高知	佐川	明暦	1656		船宿　佐川で殿様に財産没収
83	曽根	高知	出口	明暦	1656		土佐藩より苗字をもらう
27	宇賀	高知	安芸市	元禄	1698		幡多奉行として下田に入る
48	沖	高知	双海	宝永	1707		中村藩３万石　宝永地震で双海～下田
42	岡添	石川	石川	享保	1721	船大工	
138	弘田	高知		宝暦	1752	医者	
135	平田			宝暦	1754		豪商
116	西澤	大阪	和泉市	明和	1766	船主	
8	石井			天明	1782		

「下田町にいつ来たのですか？」調査

いつ来たか？	年号年代	どこから			軒数	備　考
1331年	弘元	京都		47.6	2	尊良親王配流に共に
1468年	応仁	京都			17	一条教房下向に共に
1574年	天正				4	
1600年	慶長				22	山内家由来
~1868年	江戸時代				14	
~1945年	明治~昭和				30	
不明	明治~昭和			30.0	56	
不明	不明			22.4	42	
合計				100	187	

いつの時代に下田に来たのか明確に記録がある家系が８９家ある。

下田に樋口家があった！

●上記の岡さんの調査資料から下田に樋口家が存在していて、樋口真吉の縁者だというのです。その樋口家は中村から下田に来た事、先祖は一条家と共に中村に来たと伝えられていました。早速下田の樋口さんにお目にかかりましたが、現在の当主の方は詳しい先祖の来歴に就いてはご存じないようでした。ただ一条公と共に来たとすれば長曾我部氏が一条氏を滅ぼした時に一条兼定の継嗣を高知へ移して大津御所としたという歴史があり、当然家来の家族がそれに従ったことは想定される。渋谷雅之先生の「樋口真吉日記」では真吉の父「信四郎は安永五年長岡郡大津村に生まれた。」から始まり土佐藩の足軽募集に採用されて中村に来たの記述になっているが、下田の樋口家の伝承が事実なら、中村に残っていた樋口家と高知から来た樋口家があるのかもしれない。今後の調査に期待したい。

編集後記

●岡照美さんの下田の調査資料にはおどろきでした。樋口家のルーツが一条氏と共に京都から来たとすると樋口真吉顕彰会とすれば今まで幕末以降の樋口家がテーマでしたが、一条家と共に来たとなると夢が広がります。

●十一月十四日真吉の生誕日です。今羽生山の登り口に樋口家の墓所の案内板を建てようと検討しています。２件の見積もりが出ていますが、まだまだ検討の余地がありそうです。

●十一月三日樋口真吉杯幡多剣道大会が武道館であります。例年通り盛会になると思います。九時からの大会に応援をお願いします。